

Journal of Global Media Studies 発刊にあたって

グローバル・メディア・スタディーズ学部は平成18年4月に駒澤大学に開設され、ようやく1年の時が過ぎようとしている。この時期に、本学部の研究および教育の活動に関して、その展望、成果、議論などを敷衍し発表する場としての本誌が発刊されることは、誠に喜ばしいことである。これにより、学部の構成員の考えや思いが広く公開され、それに対する反応、評価、提案などのやり取りのチャンネルになることを期待している。

グローバル・メディア・スタディーズという名称は、非常に長い名前であるが、ここには多くの思いが込められている。「グローバル」に関して言えば、現在の世界の情勢、特にその政治、経済、社会などはすべからくグローバル化している状況にあるという認識につながる。次世代の人材育成を目的としている大学では、本来どの分野においても、初めからグローバルに物を考えることを教えねばならない。日本の産業や技術が世界をリードしているはずではあるが、それが経済環境に直接反映してこないのは、日本というやや狭い世界に閉じこもって活動しているのが理由だとよく言われる。それを打破し、頭の中をいつも世界を相手に考えるように学生に教えたいのがまず最初の目標である。その手段としてのリングフランカである英語とその教育は、わが国のどこでも必要であり、その新しい指導方法や学習環境の構築、体系化は、我々に課せられた最重要な任務である。

「メディア」に関しては、広く人間の脳の活動を支える物、技術、仕組みの統合的環境と捉えたい。そこでは、ITに関わるもの、人間のコミュニケーションなどの活動に関わるもの、社会という仕組みの中で情報の流通や利用に関わるもの、またそれらが渾然一体化した環境の中で、新しい産業やビジネス、サービスの創生に関わるものというように非常に幅広く捉えられる。平成18年度には、関連する技術や商品がなぜか一斉に同期して世の中に現れた。大容量の媒体HD-DVDやBlue-rayの商品化とそれに基づく多くのデジタル機器の出現、液晶やプラズマによる薄型のTVの急速な普及と地上波デジタル放送への助走、携帯電話の番号移動制と新規キャリアの参入、PS3やDS、Wiiのような次世代ゲーム機器の発売、久しぶりの大改造であるWindows Vistaの発売、そしてGoogleの大爆発とそれに対抗するわが国の「情報大航海プロジェクト」の提案、さらに邦画が洋画のシェアを逆転したといったこと等が、なぜか同期して出現したのである。これからの時代は、このような多くの要素を融合し、その環境の中で新しい考えを示し、提案し、創生していくことが求められる。それに真剣に取り組めば、非常に豊かな成果の得られる時期になったと言えよう。

「スタディーズ」は、上記のような目標を持ち、新しいメディア学あるいはグローバルメディア学を体系化することをいつも考えていこうという意味を持つ。大学のもう一つの役割は、知の創造、体系化である。そのような目標は、いつも心の奥底に秘めて取り組んでいかねばならない。

上記にあるように、本学部の対象としていることは、文系、理系といった単純なカテゴリで割り切れるものではない。むしろ、両者の融合、あるいは衝突の中に新たな創生が出現するのではないだろうか。その意味では、本ジャーナルは、学術論文、実験報告、実地調査レポート、デザイン発表、新規提案、あるいは概念の敷衍などさまざまな形態のものが混在すると思われる。そのような混沌の世界があつてこそ、新しいイノベーションが興るはずだ。このジャーナルが、そのようなことを期待する人たちに何らかのインパクトを与えることができれば幸いである。

平成19年3月